

---

# 異式の鏡線

風箱

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異式の鏡線

### 【Nコード】

N9066F

### 【作者名】

風箱

### 【あらすじ】

繋がった世界の影響により、この世全ては変わり始める。でもそんな世の中のことなどほとんど人は知らないし、皆が皆普通に暮らしたいだけ。いろいろゴタゴタもあるけれど、毎日何とか生きてます。

## 失わぬ記憶とキミが帰る場所

それは古き夢の奥に座するモノ。焼き付けられた痛み之最奥。霞むことなく塗りつぶされた黒が写す世界のカタチ。

あれは死にも等しい眠りの中。

頬に感じるのは鈴の振動と羽虫の鳴き声。

それを奪う者は、痛みに嘆き喘いだ。

横たわる骸に杭を打ち、心臓よりも深き場所に手を伸ばす。目覚めぬ意識を手繰り寄せ、貫く意識は自身を浸食する。

まるで全てを無くした浮遊感。

くりぬかれた空洞に納められたソレがようやく馴染んだことで、ようやく自分を取り戻す。

駆け巡る血流は全身に悪夢と呼べる記憶を運び込む。

それはたとえば、血を流す少年。

それはたとえば、涙に濡れる少女。

それはたとえば、終わりを歌う世界。

それはたとえば、たった一人の愛しい半身。

そして最後に自分の居場所を見つけたとき、ようやく生きていることを実感する。

だから、あの少女の言葉が霧月透夜を、容赦なくたたき起こしてくれた。

『おはようございます トーヤ』

あの、求めてきた少女が跨っていた。

あの、泣いていた少女がそこにいた。

あの、何も変わらぬ彼女が、ただ、優しく微笑んだ。

終らぬ夜が見るいつかの記憶。  
まだこの世界は始らない。

五月の上旬、春の気配も去ろうとしていたその日、透夜は懐かしい街に帰ってきた。電車の中では微妙にイヤな夢を見ていたためあまり気分はよくなかったが、いざ街に下り立つとそんなこともさっぱり忘れて郷愁に浸る。

今まで共に暮らしていた育ての親と言うべき人物は一月前から行方不明になり困っていたところに、まるで分かっていたかのように、いや、いろいろとこちらの事情を詳しく知っていたことから、完璧に分かっていたのだろう。と透夜は推測している。幼馴染からの手紙で、とんとん拍子にこの街「守那市」かみなしへ帰ることとなった。そして現在は、二人はそろって彼ら呼び寄せた張本人自らこれから暮らす住居へ案内されている。

「久しぶりだな。遅ればせながら退院おめでとうと言っておく」  
「ありがと。でも、本当に遅いから。もう四年も前のことだから。しかし、その後から今までのことこれからのことは全部お嬢が手配してくれたんだろ。その点はすごく感謝してるよ」

透夜がお嬢と呼ぶ人物は、彼より三つ年上の幼馴染にして透夜の保護者的立場の人物である黒式流のくろしきながれこと。長い黒髪をなびかせ優雅に歩く、元々は透夜の呼び名どおり本当にお嬢様だった人。切れ長の眼つきで、モデルも真つ青の美人であり、黙っていれば言い寄っ

てくる男は多いだろうなと透夜は何時も思っている。

現在は家族から離反し、悠々自適の社会人生活を送っていると、透夜がこちらに来る前に手紙で近況を聞いている。

「なに、私の願いでもあるからな。また、皆で暮らせる日が」

遠い目をしながら本当に嬉しそうに微笑む笑顔は、透夜に遠いあの日を思い出させる。あの五年前の一件で全てがバラバラになってしまった時から、彼女は透夜が考えるよりも多くの心労を重ねてきたことだろう。それも、全て透夜を含めた他人の為だけに。

のわりに、老け込んだ様子が無いどころか、昔一緒にいた時より磨きがかかった美人になっていると感じるのはどうしてなのか。

「それと、宥紀 だったかな、お前とも久しぶりだな」

「えっ、えっと」

今まで透夜の半歩後ろを歩いていた小柄な少女は、突然かけられた声に、驚いてあわあわと視線をさ迷わせる。人見知りの激しい性格故に、しょうがないと透夜は助け舟を出す。

「お嬢は宥紀とも知り合いだったんですか？」

「ああ、コイツを拾い上げたのは私だからな」

まあ、あの人とお嬢が繋がっているなら当然かと今更ながらに納得した。

四年前、退院した後透夜は拾ってくれた人と暮らしていた。その頃に、突然一緒に暮らすからと透夜を拾った時のような気軽さでその人物は、今透夜の隣にいる少女、時燈宥紀ときとうゆうきを紹介した。常に長

い白髪の髪で目元を隠し表情を隠している。だけど、態度があんまりにもあんまりなため、非常に分かりやすいとは透夜の弁。だがそこが可愛らしかったりもするとも言つ。

透夜は彼女も自分と同じような立場なのだろうと勝手に解釈をしていたため、あまり彼女の過去を聞いたことが無い。だから、何処で暮らしてきたかは聞いたことがあっても、どのように暮らしてきたかは聞いたことが無かった。

「えつと、それじゃあ、もしかして私をあそこから出したのは？」

「ああ、私だ。だがお前が私を覚えていないのもしょうがないか。お前を拾った時はまだ眠っていたんだつたな」

ええ、と申し訳なさそうに小さくなる宥紀。やはりお嬢は苦手なタイプかなと透夜は少し心配になる。

しばし三人は、他愛の無い会話を交わしながら、透夜が暮らしていた五年前と代わり映えの無い風景を見ながら道を歩いていく。次第に駅前のにぎやかさを離れ、微妙に寂れた商店街を通り過ぎ、いつしか住宅街からも微妙に外れた場所にやってくる。

「あの、お嬢？ まだ付かないのか？」

いい加減怪しい雰囲気になってきたため、透夜は思わず疑問を口にしてしまう。

「あと少しだ　というより、もう見えた」

駅前から約数十分、街外れに在る古びたアパート。ちょっとした衝撃　たとえば、軽い地震が来ただけで倒壊してしまいそうなほ

どにボロっちいというのが透夜の第一印象。

「つーか、お嬢もここに住んでる？」

「ああ、見た目通り中もアレだが、いろいろとめんどくさくないからな。まあ、何か不便があったら私に言え。金なら存分にあるから問題ない」

「いや、さすがに何でもかんでもお嬢に面倒見てもらうわけには…  
…タダでさえ生活費や学園の金はお嬢任せなのに」

こちらに引つ越す際に透夜は学校のことは諦めていたのだが、流が問題ないの一言で全てを済ませ、挙句宥紀まで学園に通わせて貰う手続きをしていたことを手紙で見たときには驚いた。それどころか、こちらに来る前に何度かやり取りした手紙に書いた願いを、出来る限り全て叶えてもらったことに、透夜は流に多大な感謝をしている。だからこの先は、出来る限り自分の力でやってき、いつかはこの恩を返そうと思っていた。

「気にするな。言っただろ、私の願いの為だ。それがお前の為にもなるのなら嬉しいさ」

「ありがとう。でも、出来る限りは俺達でやるよ。もしもの時は遠慮なく頼らせてもらっけど」

そうしろ、と流は小さく笑い透夜の髪を撫でるように触れた。その仕草はまだ幼馴染を、共に子供をやっていた頃と同じもの。一人大人になってしまっても、やはり目の前のお嬢様は変わらないなと透夜は思う。

「さあ、ついでぞ。ここが新しくお前達が暮らすことになる鳴神莊なるかみそつだ」

こうして透夜達の懐かしい街での新しい生活が始るのであった。



## 失わぬ記憶とキミが帰る場所（後書き）

みなさん初めまして。初投稿なので、いろいろと至らないところがあるかもしれませんが、最後までお付き合いしてもらえれば幸いです。

## その世界そのカタチ

透夜が暮らすことになった鳴神荘は二階建ての鉄筋コンクリート。部屋数は一階に三部屋、二階に二部屋＋物置となっていると流から説明をうけた。

透夜は二階にある205号室の鍵を受け取り、流とは部屋の前で別れる。ちなみに流の部屋は隣の204号室であるため、困ったことがあつたら壁ぶち破って来いとか言っていた。しかし、それより早く、二つの部屋を繋ぐドアでも取り付けそうだなと透夜は思った。

「さて、ここが今日から俺達が暮らす部屋だな」

部屋は八畳ほどあり、小さいながらもキッチンとユニットバスが完備、外から見た見た雰囲気とは裏腹に内装は綺麗になっていたため、思っていた以上に快適に暮らせるかもしれないと少し驚いた。

「……ふう」

気が抜けたのか、宥紀は小さくため息をついた。

「疲れたか？」

さすがに朝一番から電車を乗り継いでの長旅だったため、さすがに疲れたかなと思ったのだが、宥紀は小さく首を横に振って否定。

「いえ、えつと、その、私、あの人どこか苦手っぽくて……」

「ああ、お嬢？ まあ無駄に威圧感というか、存在感があるからな。確かに宥紀が苦手なタイプだよな。俺も昔は苦手だったし」

その言葉に宥紀がちょっと意外という目をする。確か始めて出会った頃は、あまりにも浮世離れた存在に自分から話しかけられなかったことを透夜は思い出した。

「でも、話しをすればいいヤツだよ。まあ、いろいろと唯我独尊的部分があるから付き合いづらいところもあるけどさ」

「そう、なんですか……」

これから分かっていけばいいさと、宥紀の肩をたたき話題転換を図る。

「それじゃ、これから買い物行こうぜ。さすがにコレだけじゃ辛いだろ」

引越しの際に持ってきたのは、二人ともリュック一つ分。数日分の着替えと必要と判断したこまごまとした物のみ。他の物はこちらで買いそろえればいいという流の案に従った結果。

「早速コレの出番だな」

取り出した一枚キャッシュカード。流が透夜に与えた金を引き出させる為のアイテムだ。一度額を確認したらアホみたいに入っていたのに驚き、さらにコレを使い切ってもまだ催促してもOKと言う流に、どれだけお前は金を持っているんだと突っ込んだら、中流家庭の暮らし程度なら人生三回くらい遊んで暮らせるんじゃない？と言われたことを覚えている。

「とりあえず生活用品、買いに行こうぜ。宥紀はこの街初めてだから

案内ついでにさ」

「はい。よろしくおねがいますね」

この街に来て始めて見せた宥紀の笑顔に一安心をする透夜だった。

夕暮れも過ぎ、空は紺色に染まり星も瞬きだしたころ。両手に多くの荷物を抱えた透夜とどこか浮かれた足取りで横に並ぶ宥紀。黒髪の平凡な日本人男子と、白髪でどこか浮世離れた小柄な少女。傍から見れば、この二人の状況はどのように見えるのだろうか。しかし、そんな周囲の目など気にすることなく、二人は鳴神荘への道を歩いていった。

宥紀への街案内も済ませ、スーパーで食事の買い物をした後、透夜はふと気が付いた。

「そういえば、冷蔵庫。無かったんだっけ」

今まで暮らしていた場所では、家事全般の役割は透夜が担っており、ついその癖で生ものを始めとする食材を数日分買い込んでしまった後の一言。

「そういえば、そうですね。でも、あの黒式さんのところに置かせてもらえばいいんじゃないですか？」

「それもそうか。お嬢も一人暮らしだし、冷蔵庫ぐらい持ってるだろう」

いくらぶるじょわじーだからと言って、毎日外食というわけじゃないだろう。たぶん。そうあってほしい。

金はあるくせに小市民育ちのため、透夜は食材を無駄にすることはダメだという使命感を持ってしまっている。

「それに、お嬢の事だから歓迎会をやってくれるだろうから、この量じゃ足りないかもな」

あははと笑い、そこでいったん言葉が区切られる。しばし沈黙が訪れた後、透夜は探るように尋ねた。

「あのさ、宥紀。街を見て回ってどうだった？」

どこか遠慮がちに、しかしそれはどうしても尋ねたいこと。

「そうですね、悪くはないです。それに、どこかあちらを思い出させる雰囲気を持っています」

笑顔の中に影を宿す宥紀。しかしその返事は概ね透夜の予想通りであり、この街はやっぱりあの日のままなのだなと実感した。

「まあ、この街にはいろいろあるし。迷いの森然り、人喰い桜然り、殺戮鬼然り。細かいところを上げりゃキリが無いほど、なぜか集まってやがる。それらはやっぱり、あつちの影響を強く受けている証なんだろうな　なんでこの街なのかはよく解らんけど」

子供の頃から話しには上る怪異や異変の数々。しかし、その真偽を本当に知っている存在は数少ない。そう、真偽。つまり、一方的な『偽』ではなく、真も交わる事柄が存在するのだ。

本来『ありえない』と人の世で否定されるモノ。しかし、それは確かに存在しこの世にいる。ただそれは『人』の目に映ることがないだけの話し。

しかし、それが人の目に見える日も遠からず来るのではないのか  
と言うのが、つい先月まで透夜の育ての親をしてくれていた時燈零ときとうれ  
司じという女性の言葉。なぜならこの世界は、大きな変革の時を迎え  
ているという枕詞と共に零司は透夜に今の世界のあり方を語って聞  
かせたことがある。

この世界は、ある時期を境にどこか別の世界と繋がった。それは  
異世界と呼ばれるべき場所だと零司は語る。

この世で多くの神や精霊といったる存在が人々の否定によって希  
薄になってきた昨今、その繋がった世界から流れ着いた神や精霊達  
が、今この透夜達が暮らす世を己の暮らしやすい場所　つまりそ  
れらが暮らしていた、魔道と呼ばれる力を人々が持ち、神や精霊が  
世に生き、この世界では御伽噺や物語で語られるだけの、幻想と呼  
ばれる存在たちが闊歩するファンタジーの世界に変えようとしてい  
るらしい。今はまだ多くの人に気が付かれてはいないが、その影  
響で世界には多くの怪異や異変が出現し始めたと言う。

「昔から、それこそあちらと繋がる前から、そういったモノが集ま  
る場所だったんじゃないでしょうか」

「それ、お嬢も昔言ってたな」

まだ透夜がそのような存在を物語の中でしか知らず、フィクシヨ  
ンだと思っていた頃から、流は一人街で噂される怪異や異変の話し  
を仕入れては、透夜をつれてまわしたり一人で調査していたりした  
記憶があった。

「まあ、俺らは俺らで、降りかかる火の粉だけ払ってりゃいいんだ  
けどな。せつかくお嬢が気を利かせてくれたんだから、普通の人と  
しての生活を満喫すればいいさ」

「でも私は……その中にはいいんでしょっか」

私は　と続けようとした言葉を遮り、透夜ははっきりと断言した。

「気にするな。零司さんも言ってたけど、俺達は家族みたいなもんだろ」

その言葉に、ぼつと頬を染める宥紀。そして満面の笑みを浮かべると共に、はい、と元気良く言葉を紡いだ。

## 一つ屋根の下

「お嬢、いるー？」

鳴神荘に帰ってきた透夜は、食材の為とりあえず隣の流の部屋を訪ねる。

こんこんとノックをして呼びかけると、扉を開けて出迎えたのは流とは別の人物だった。

「キミは さつき『お嬢』って言ってたから、霧月透夜くんだね」

「は、はい」

綺麗な黒髪を短く切りそろえ、優しそうな眼つき、見る人が見れば男性とも女性とも見えるその人。だが、顔から少し視線を下げれば、無駄に自己主張のはげしい巨乳が目の前の人物を女と知らせている。

いきなり見ず知らずの女性 しかも大人 の出現に、思わず緊張する透夜。

「俺は瀬野和那<sup>せのかずな</sup>。ここの一号室の住人兼大家代理だ」

と言っても、大家としての権限はほとんど流に取られちゃってるんだけどねえと苦笑した。なんだかこの人も流と付き合ってる九芳しているんだなあと親近感を抱くと同じに、あの流と親しくしている人物がいるのかと、内心かなり驚いていた。しかもかなりまともそうな人物が。

「さつきまで流れとキミ達の歓迎会やろうかって話してたんだけど



「

「和那、さっさと透夜を上げる。立ち話しをすることもないだろう」

「ああ、ごめんごめん。それじゃあ上がって」

おじゃましますと、和那に案内されて流の部屋に足を踏み入れる透夜。しかし、流の部屋に足を踏み込んで驚いた。

「透夜、どうした？」

「いや、だって何にも無いし」

そう、その部屋は流の私物と思わしき物が何もなかった。まっさらの、まさに自分達の部屋そのまま。お前は何時から住んでいるんだというほど生活感がなかった。

「失礼な。押入れの中に布団とパソコンがあるぞ」

「いや、あんたね。食材保存の為に冷蔵庫借りにきた俺が馬鹿みたいじゃないか」

「ああ、食事なら何時も外だし、帰ってきたときには和那が作ってくれるからな。ここは情報整理と寝床のみに使っただけだ」

「うわあ、それじゃあこの食材どうしようか」

もったいねーと思っていたら、和那から助け舟が出された。

「透夜くん、冷蔵庫ならキミの部屋の隣の物置にあるから、持って

行くといいよ」

「えっ、いいんですか？」

「どうせあそこは　ううん、なんでもない。あそこに有る物全部持っていいよ」

なにやら笑みを浮かべながら黒いオーラを出している和那。怖かったのでとりあえず当たり障り無く透夜は、それじゃあいただきます、と返事しておく。

「それで歓迎会なんだけど、流の部屋でやろうと思ってね。見てのとおり何も無いから鳴神荘の住人皆呼んでも大丈夫そうだし」

「そういうわけだ。後で迎えをやるから、それまで物置あさつてめばしい物見繕っておけ」

「うん、ホント全部持ってっちゃっていいから」

だから、黒いオーラを出さないで欲しい。

この先、自分からは物置のことは触れないようにしようと思心に誓う透夜だった。

「と言う話しがあったのは、確か一時間も前じゃなかった気がするんですが」

と、突っ込みを入れてみるものの、ものの見事に全員無視。それどころか、主役の一人であるはずの宥紀がお酌に回っているのは何

でだろう、と遠い目をする透夜。

現在ドンちゃん騒ぎになっているのは202号室。つまり、透夜の部屋だった。

物置（と言うより、もともとは誰かの部屋だったのではないかと  
言えるほど、きちんと物が配置され手入れもされていた）で透夜は  
和那の言葉に甘えて、いろいろとあさっていたところ、宥紀がまる  
で某猫型ロボットに泣きついてくるメガネ君のごとくすがりついて  
きたのが始まりだった。

部屋へ戻ってみれば、流と和那、そして見知らぬ二人の人物を含  
めて四人全員が酒を片手にしており、透夜が知らない女性が乾杯の  
音頭を取っていた。

「とりあえず、勝手に始めるのはいいですけど、彼方達誰ですか」

こういったタイプは突っ込むだけ無駄だと経験則で解っているた  
め、とりあえず名前ぐらいは聞きしておくことにする。

「あはは、私は静森朝霞しずもりあさかで102号室の住人だよ、よろしく！ん  
で、こっちが私のとなり、103号室の藤田夜須ふじたやす！」

すでに酔っているのかという勢いでぶんぶんと手を振る朝霞と名  
乗った女性と、その隣でゴメンねと小さく手を合わせている夜須と  
呼ばれた青年。

「実はここでやることになったもの、朝霞がかってに酒開けちゃっ  
たもんだからさ」

「なによ夜須、この部屋も物無いんだし、流のトコ行かなくてもい  
いじゃない」

「まあ、私も朝霞は部屋に上げたくないしな」

売り言葉に買い言葉、朝霞がなにおー！ と立ち上がり、夜須がどうどうとなだめに入る。

だが透夜が見たところ、ただ朝霞が一方的に流のことを嫌っており、流はわざと自分も嫌っているんだぞ的スタンスを見せているように見えた。そして、その間に入って仲介している夜須はマジ顔で止めに入っているのがとても不憫に感じられた。

「ふーんだ、霧月だっけ？ アンタこんな女のヒモやってるんですよ。なんかキツツイ見返りとか求められてない？」

やっぱりその辺の話し、皆に行き渡ってるんだあ、俺ってヒモに見えるんだあ、とちよつと遠い目になる透夜。

「私が透夜に見返りを求めるものか。お前だって夜須を困っているくせに人のことを言えた義理が？」

「ばっ！ 誰が誰を困ってるって！！」

「なんだ、聞こえなかったのか？ 随分耳が遠くなったのだな」

うきー！ と流に飛び掛る朝霞だが、ひらりと舞うような身のこなしで流が避けて、床に顔面ダイブ。むぎゃあ！ という悲鳴と共に沈黙が訪れた。

「さてあのバカも黙ったことだし。透夜と宥紀、ここはこんなバカどもばかりだが、よろしく頼むぞ」

何事も無かったように流はグラスを向けて乾杯をする流。それに

続いて和那も俺もよろしくね、とグラスを傾けた。

「それじゃ、えっと、藤田さん、よろしくおねがいますね」

背丈は透夜と同じくらいでも、いかにも苦勞してますといった顔  
つきの夜須。まとう空気がすごく大人っぽいため、透夜は敬語で話  
しかける。

「あはは、ボクのことには夜須でいいよ。うん、よろしく透夜君に宥  
紀君」

そして乾杯を交わした後、再び立ち上がった朝霞のおかげでドン  
ちゃん騒ぎが舞い戻った。

ただただ飲んで食べて騒いで 後片付けが大変そうだが、楽し  
い時間が過ぎていく。しばらくは緊張していた宥紀も笑顔を見せだ  
したので、透夜はよかったと一安心。それはまるで父親が娘の一人  
立ちを心配するような心境。

ただ、それを見透かしたかのような朝霞の一言は凄まじく余計だ  
った。

「あのさ、透夜と宥紀は乳くりあうような関係なんだよね？」

「絶対違います」

なんだ、その表現は。せめて恋人とか言って欲しい。でも別に恋  
人とかでもないんだが。宥紀もそこで顔を赤くするから誤解される  
だろ。

とにかく突っ込みたい気持ち一杯だった。でもこの手の酔っ払  
いをいちいち相手してはキリが無いので、適当な返事で適当に  
流すことにする透夜。

「私はそのつもりで零司に送ったのだがな」

「お嬢、アンタがそんなこと言う人だったなんて……」

アンタはこんなこと言うキャラじゃないだろと思っただが、さすがに当然冗談だと言ってくれたためほっと一安心。透夜の中のキャラは維持できた様子。

「じゃあ、この中でツガイは和那だけかあ」

「ブチ殺すぞ」

あの温厚で優しいが印象的だった和那なため、突然吐かれた暴言に透夜はさーっと血の気が引く。凄く気のせいだと思いたかったが、流と夜須はすかさず二人から距離をとったところを見ると、どうやら本当に言ったようである。宥紀も本能的にヤバイと感じて透夜の後ろに隠れた。ただ一人、その空気に気がつけない朝霞。

和那の周囲を包むそれは、あの物置の件に触れた時の黒オーラを数倍濃く、今にもダークサイドに落ちそうな雰囲気。

「あっはっは、そうだよな。自分の母親に惚れて追いかけてった男なんてブチ殺したいよねー。透夜だってそう思うでしょ」

ここでこっちに話題をふってくるのは心底やめて欲しいと思う。ただこの瞬間、鳴神荘を揺るがす（物理的に）ほどの出来事があり、朝霞と宥紀にトラウマを植えつけることになった事は語っておこう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9066f/>

---

異式の鏡線

2010年12月31日19時47分発行